

筑波大学日本文学会会報

第39号

2015年2月

『河海抄類字』のこと (吉森佳奈子)	1
日本文学会だより	3
研究室だより	6
卒業生だより	10
日本文学会教員学生名簿	13

『河海抄類字』のこと

吉 森 佳 奈 子

南葵文庫旧蔵書のなかに『河海抄類字』という本がある(『国書総目録』によれば、他に、国立国会図書館、宮内庁書陵部、無窮会神習文庫にも所蔵があるようであるが、未見)。南葵文庫の印のほかに「陽春廬記」の印があり、小中村清矩の蔵書、南葵文庫のなかでもとくに善本といわれる陽春廬本の一であると知られる。

いろは引きで、「い」之部「す」之部まで一一五〇項、「る」はない。「いたづらふし」「母廿三丁ウ」「」は、分注をあらわす。以下同じ)のように、言葉をあげ、その所在の巻名、丁数を記す(「母」は帚木巻をあらわす)。

この書については、『源氏物語事典』が小山田与清の著かとするが、不明、成立時期も、『源氏物語注釈書・享受史事典』に、江戸後期と指摘されるが、詳細は不明である。『源氏物語事典』に「価値」として、「丁数を示しているが、『河海抄』もどのような本によったか明らかでないため、作者以外では利用価値が少ない」とあるが、同じ南葵文庫旧蔵の陽春廬本の『河海抄』(二十冊本。遊紙に「花廬家文庫」の印のある本)によっていることが、双方の見あわせによってたしかめられる。いろは引きとしては「い」から「す」までとおされているが、採られているのは桐壺巻から花宴巻までの八巻の言葉である。『河海抄』は全巻注釈であることからすると、未完の可能性もあり得るが、実際に手にすると、そうは見えない。

「源氏見ざる歌詠は遺恨ノ事也」という俊成の言葉はしばしば引用されるが、『六百番歌合』判詞では、「花の宴の巻は、殊に艶なる物也」につづき、『源氏物語』花宴巻の朧月夜の歌をふまえた左の歌を勝とする際の言葉である。中世、『源氏物語』のなかでもとくに愛好されたのが、貴族の盛時を美しく描きだした紅葉賀巻、花宴巻であったことと、『河海抄類字』が花宴巻までであることとは一繋がりのことなのかもしれない。

また、索引の体であるが、「ゆゑつけて」「由付ゆゑありて也母五丁ウ」のように、漢字をあてたり、簡単な注を載せている場合もある。漢字をあてて意味理解を示す「けそうに人しけく 顕証又見証」のような注は『河海抄』に多く見られ、また『仙源抄』等、和漢字書のような注釈書もあり、その類とも見ることができ。そのなかでも、もつぱら『河海抄』に依拠していることが堀部正二によって指摘されている『和漢字源通釈抄』（陽明文庫蔵。国文学研究資料館のマイクロフィルムで見た。奥書によれば、耕雲著、応永三年成立）は、和漢字書的なものが、夙に、『河海抄』をもとにしてつくられていた状況を示す（先掲『仙源抄』も実際にはかなりの部分、『河海抄』と一致するにもかかわらず、依拠した先行注釈書として『河海抄』をあげていないのは不可解なのであるが、『和漢字源通釈抄』のような類を参照していた可能性がある）。

このような書については、先掲『源氏物語事典』の記事、また、堀部が「注釈書としては見るべき所も乏しく、さしてこれに重要な価値をも認め得ないものである」（『中古日本文学の研究』）というように、積極的な評価はされてこなかった。しかし、何故『河海抄』についてこのような書がつくられたのかということがなお問われねばなるまい。

ここで留意されるのが、弘治二年本『節用集』（南葵文庫旧蔵）の、「夕附夜ユラツケヨ」のような項目である。「日本紀」とあるが『日本書紀』には見られない。このような例は少なからず見られ、『河海抄』にも同様に見られることは注目してよい。『河海抄』から直接字書類にはいつたのかどうかはわからないが、一方で、弘治二年本『節用集』には、「婀娜ナノヤカニ」『河海』のように、出典として「河海」と表示する項目も見られ、『河海抄』がもとになったひろがりの存在が推測されるのである。

『花鳥余情』以降、『源氏物語』注釈書は物語をよんで理解するための注となつてゆき、必ずしもそうなっていない『河海抄』は尊重する意識はあつてもその注釈態度がうけつがれることはなかった。文字通り敬遠されていたようなのであるが、一方で、『河海抄』の、『源氏物語』の言葉に漢字をあてる注は近世になつても引用されつづける。『河海抄類字』は、わたしたちにとつては、注としての意味がわかりにくい漢字による和語の注が生きていて、『河海抄』はそのおこりと捉えられ、索引をつくりたいくなるようなものであつたことを思わせるのである。